

まだ晴彦の

復活256号

熱い心でHot県 まいちゃん通信



# 敗戦の日に先人の言葉をかみしめながら 不戦を誓う



信頼関係があること、これが武器よりも一番大切と語る中村医師

8月15日、敗戦から75年の節目を迎えた。TBSの朝の報道番組『サンデーモーニング』が戦後生まれが2020年7月末時点で85.2%を占めたと伝えている。『風をよむ』の

コーナーでは、戦争体験世代がどのような思いで平和を守ろうとしていたのか、まとめてくれていた。今一度先人の言葉をかみしめ、不戦の決意を新たにしようじゃありませんか！

的平和主義というに値する行為ではないのか。『もうあんなことは2度としたくない』というそのシンボル。その意味では憲法9条はひとつの民族の理想であり、それと同時に世界の人たちの理想であるわけです。」

野中広務 (自民党・元官房長官)

2018年1月26日死去

戦争を美化しない

子どもが経験したあの忌まわしい戦争の歴史が再び我が国で繰り返されないように。私たちのような古い苦しい時代を生きてきた人間は再び国会の審議が大政翼賛会のような形にならないように(願う)。



日野原重明 (医師)

2017年7月18日死去

命を守るには絶好の憲法



『命を守る』ということについてこれほどしっかりとつくられた憲法は、世の中のどこにもないので、人間の根本にかかわることは憲法に書かれている。9条は(憲法の条項のうちで)最も中心になっている。憲法を守ることが平和な世界を作る。

後藤田正晴 (自民党・元副総理)

2005年9月19日死去

負の歴史に目を背けない

“歴史”は、どこの国でもありうるが権力者が作り替えることがある。やはり、真実に基礎を置いた正しい歴史認識をする、そして「負の歴史」についてはそれを繰り返さないよう教訓にして生きていく、そういう歴史観を持っていないと国は永続しない」



中村哲 (医師)

2019年12月4日死去

丸腰こそが積極的平和主義

戦火の絶えないアフガニスタンの地で平和を取り戻すため、争いの原因となっている貧困を解消しなければならないと、井戸を掘り、水路を作り田畑を蘇らせた中村医師。銃弾の飛び交う地で丸腰で支援をし続けた、この覚悟と実践こそが積極

三島由紀夫 (作家・右翼思想)

1970年11月25日死去

戦力を持たない覚悟を持って

憲法9条ってのは全部いけないと言ってるんじゃない。人類が戦争をしないということは立派なことですよ。(戦力を保持しないという)第2項がいけないでしょ。日本の変な学者がそれを逆解釈して自衛隊を認めている。日本人はごまかしごまかし生きてきた、この二十何年間。僕は嫌いなんです、そういうことは。僕が死んでね、50年か100年経つとね、『ああわかった』という人、いるかもしれない。



吉村昭 (作家)

「あの戦争、負けてよかったね」

VS 城山三郎 (作家)

「戦争はすべてを失わせる。あの戦争で得たものは憲法だけだ」

# 天皇の言葉

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来75年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、新たな苦難に直面していますが、私たち皆が手を共に携えて、この困難な状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。

# 天皇にあって 安倍総理にないもの

先人の平和を希求する思いと、今年の8月15日に天皇と安倍総理が何を語ったか、読み比べてみませんか。

何を語り、何を語らなかったのか、その思惑は何か、そこから見えてくるものがあると思います。後藤田さんが言うように権力者に歴史を塗り替えられないために、チェックしてみませんか。

野坂昭如 (作家・映画「火垂るの墓」原作者)  
2017年7月18日死去

戦後の日本は平和国家だというのがたった一日で平和国家に生まれ変わったのだから同じくたった一日でその平和とやらを守るといふ名目で軍事国家、つまり戦争をする事にだってなりかねないヒョイとあの時代に戻ってしまいそうな気がしてならない



私たちの国がさらに戦争がしやすい国に憲法を変えていく  
そういうことに対しては  
よほど慎重に考えなければならない  
私にとって10歳までの少年時代は戦争に明け暮れていました  
その後戦争によって誰も殺さず  
誰も殺されていない  
これは日本御近代史でもあるいは今  
よその国を見まわしても例のないことであります  
あの戦争のことを記憶し続けるということが  
この平和を終わらせないことに繋がっていると  
私は思います  
変わらないのはあの戦争が2度と  
繰り返してはならない  
「国家的失敗」「国家的愚行」だという点  
同じ事を繰り返さないように  
努力することができるのも  
私たちだし  
そのために歴史から  
どんな教訓をくみ取るかも  
私たち次第なのです。



筑紫哲也 (ジャーナリスト)  
2008年11月7日死去

# 安倍総理の式辞

天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、戦没者のご遺族、各界代表のご列席を得て、全国戦没者追悼式を、ここに挙行いたします。

あの苛烈を極めた先の大戦では、300万余の同胞の命が失われました。

祖国の行く末を案じ、家族の幸せを願いながら、戦陣に散った方々。終戦後、遠い異郷の地において、亡くなられた方々。広島や長崎での原爆投下、東京をはじめ各都市での爆撃、沖縄における地上戦などで、無残にも犠牲となられた方々。今、すべての御霊(みたま)の御前(おんまえ)にあって、御霊安かれと、心より、お祈り申し上げます。

今日、私たちが享受している平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い犠牲の上に築かれたものであることを、終戦から75年を迎えた今も、私たちは決して忘れません。改めて、衷心より、敬意と感謝の念を捧(ささ)げます。

未(いま)だ帰還を果たされていない多くのご遺骨のことも、決して忘れません。一日も早くふるさどにお迎えできるよう、国の責務として全力を尽くしてまいります。

戦後75年、我が国は、一貫して、平和を重んじる国として、歩を進めてまいりました。世界をより良い場とするため、力の限りを尽くしてまいりました。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。この決然たる誓いをこれからも貫いてまいります。我が国は、積極的平和主義の旗の下、国際社会と手を携えながら、世界が直面している様々な課題の解決に、これまで以上に役割を果たす決意です。現下の新型コロナウイルス感染症を乗り越え、今を生きる世代、明日を生きる世代のために、この国の未来を切り拓(ひら)いてまいります。

終わりに、いま一度、戦没者の御霊に平安を、ご遺族の皆様にはご多幸を、心よりお祈りし、式辞といたします。